

〔翻刻〕柳の糸(中)

堀文庫研究会
(代表・田中則雄)

島根大学附属図書館堀文庫所蔵の後期読本の中から、小枝繁作『世三開堂 榎村奇伝柳の糸』(文化六年刊)を翻刻する。全五巻のうち、前号に収録した巻一・二に続き、本号には巻三を収録する。

世三開堂やなぎ 榎村奇伝 柳の糸巻之三

東都 歐離陳人 戯編

第五回

壯夫勇を逞たくまして妖怪を斬きる
老翁涙を払はらつて山賊を語る

且説其時遙なる山の方より、何ものともしらぬ小山の如きもの出来れり。近くなるまゝに看一看ば、面は赤く、眼はふたつの鏡を双べ懸たるがごとく、口は耳の根まで裂け、髪は丈よりも長くおどろを乱し、惣身人に似て、悉く毛生て鏡のごとく、甚恐ろしげなるもの、彼新墓を廃んとす。平太郎當吉これを見て、驚き想ひけるは、「かゝる幽陰の地なれば、山氣凝て、かく異形の天物あるも宜なり。彼新墓を廃くは、人肉を食らんが為なるべし。爾あるときはわが二オ命も危し。されど此怪異を見て逃んば、男魂なきがごとし。また討んとすとも、容易からじ」と、少剋躊躇てありしが、「兎角を云んより、運を天にまかせて、速に彼を討ばや」と、既にその準備するるとき、妖怪平太郎を顧み、只今心裡に想ししことを

露差はず云つゝ歩み来て、焼火の前にみつはぐめば、當吉大に驚き、「此妖怪かばかりの神通あれば、奈何すとも討得がたし。只此上は仏神の応護にあらずは、生ることも能はじ」と、心に諸々の仏神を祈るなかに、わきて熊野権現は日頃信じ奉れば、只願神号を念、「助け給へ」といふに、妖怪も同じく熊野の神号を唱へ、「助け給はれ」といふにぞ、當吉ますく「怕れ想ふに、焼火さへかそけくなりて物すこかりしかば、「せめては火の陽氣をかつて、我陽氣を助けばや」と、側にあるものゝ限りを火に二ウさしくべしに、長く太やかなる古竹のありしを、折くべんとし、失まちてその端、焼火を払つて妖怪の面に当りしかば、火忽ち肌にもへ付にぞ、妖怪は「あ」と云つゝ軋々として苦しむを、平太郎、「こは失ちの功名ぞ」と喜び、すかさず腰刀を抜てしたゝかに斬つければ、妖怪苦しき声をあげ、「人の神通計り難し」といひさま、長き臂を舒し當吉が鬚を引捉へひき携行んとする処を、刀をもつて斬はらふに、臂てうど斬落せば、少しひるみてたぢろくを、たゞみかけて斬刀に、終にあへなく成にけり。



卷三 ニウ・三才

此時雨歇月出しかば、平太郎息をほつとつき、まつ刀の血を拭ひなどする折から、旅人めきたる漢子、身は雨にそぼ濡たるが、たどくとして来るに、平太郎再び驚き、「こは又怪異なるにや」と、臆影にすかし見れば、何となく看おぼへあれば、少しく心おちい、「此処に二三挿絵ニウ・三オもうき給へるは、何等の人におはすぞ」と問へば、彼男、「これは旅のものなるが、賊に出会川中に投入られしかど、幸にして命たすかり、辛じてこゝには来つれ」と回答すれば、「さては甲夜のほど吉野川にてわれと同船し給へる旅人におはさずや。某も彼賊の為に不図難に逢ひ、こゝにさまよひ来れるもの也。おん身もさぞ勞し給はん。いさこの火にて濡衣などあぶり給へ」といふに、「そは忝し」と云つゝ、火の辺に寄、もへさしたる木どもを集て再び是をもやし、辺を看めぐらして、彼妖怪の殺されあるを看、こよなく驚き、平太郎を顧れば、當吉もまた旅人を看、互に面を合せつうち驚くうちよりも、旅人はやく声をかけ、「おん身は平太郎の君には在さずや」と云に、「いかにもしかなり。某が名を知るおん身は、庄司のぬしにあらさずや。こは想ひかけ

ず」と、(三ウ) 暫時言語なく、只呆れたるばかりなり。

やゝありて庄司言語を正し、「郎君いかなれば、ひとりこゝにさすらひ給ひける。甚不審さよ」と問かくれば、平太郎、「爾怪しき給ふも宜なり。そも某が此処に来れるは、専らおん身を搜索ん為なり。その縁故は這般這般なり」と、樫材を奪れしを首めとし、出雲崎にて自害せんとせし折から、卯木に環会、父が遺書を見、その旨に任せ死をとどまり、卯木と夫婦となり、岩田川に忍居て一子を設けしこと、且は時澄が非義発覚、職をやめられ行衛なくなりしこと、さて又われと夫婦一子もうけたれば、是を詫の種とし、是まで告ずして卯木と夫婦となりし罪をおん身にわびなんと四方を搜索しに、飛鳥の里に忍びおわすよしほのかに聞ば、尋ねまいらせばやと(四オ)彼所に赴しかど、そこにも在さざれば、里人等に聞はべりしに、さる人は此頃までこゝにありしかど、故郷に帰らんと去りにきと聞、再び熊野へ還らんとする帰路に、某も甲夜に吉野川にて盜賊の難にあひて危ふかりしを、漸やく免かれて此処に来り、少く心ゆりたる折から、妖怪に出遭、既に彼が為に命を失はれんとせしかど、

仏神の加護により妖怪を斬殺しぬ」と、有枝有葉を脱なく、詳かに語り聞えけるにぞ、庄司涙をほら〜と流し、「嗚呼憂世なる哉。郎君は貴人になしながら、賊しき某が女兒を妻とせさし給ふことさへ忝なきと想ふなるに、女兒が縁にかゝらひ給ひ、われを舅とおぼせばこそ、はる〜と飛鳥の里まで尋給はりしこと、いかばかりか喜ばし。かゝる心ばへに侍れば、某に告給はで卯木と夫婦と成(四ウ)給ふことを、なぞて恨み申べき。只此うへはふつゝかなる女兒ながらも、郎君の御胤を産たることなれば、いつまでも捨給はぬやうこそ願はしけれ。また某が此処に来れる縁故は、前に時澄奸計をもて光當公を失ひ、われ又その毒手にかゝりて追放せらるゝの砌、女兒を奪はれ、無念やるかたなくははべれど、彼は公の命を挟みて逆意を行ふことなれば、詮すべなく、心にもあらぬ飛鳥の里に忍び居りしに、近頃聞けば、時澄職をやめられ行衛しれずと人の風声すれば、故郷熊野に還り住まばやと、昨日飛鳥の里を立出て吉野川まで来りしに、盜賊の爲に川に投げ入れしかど、素より熊野育なれば、少く水心を弁まへ侍りし程に、辛じて陸に

游着、人家ある方を尋ね走りしに、岩石漸々とそばだち、(五ウ)樹木陰々と茂りたる所に至りぬ。こは奈何なる地方ぞと、只見れば、林の裡に火の光り閃き看へしかば、少く力を得、それを枝折としたどり行しに、高やかに木柵をまうけたるなかに四五軒の草屋あり。いと不審で、密かに柵の裡を窺えば、仁王を造り損じたるごとき漢子ども幾人も立集びしなかに、大將めきたる男中央に居て、左右のものに對ひ、『夜叉丸は何として帰りのおそきぞ。誰かある。彼が光景を見てこよ』といふに、一人の漢子、『かしこまりぬ』と出行にぞ、庄司はおのが身を木陰にひそめ、これを行去らし、尚その大將を熟看るに、まがふべうもなき時澄なれば、『彼が夜叉丸と云しは、海賊阿古根の夜叉丸がことなるべし。想へば時澄等熊野を去て行衛しれずと聞しが、さては此地方に來り、山賊行劫などする(五ウ)にこそ。こは思ひもかけぬ所に来つることよ。時澄はわが爲の讐なれど、この体たらくにては、恨みを報ゆるによしなし。一まつ此処を去り、謀をもて彼に想ひをしらすべし』と、既に身を転へして去らんとする処に、對ふのかたより、松明とぼしたる男三人、

此方をさして急ぎ来れば、『是夜又丸の帰りに来るなるべし』
 と、又木陰に立かくれてこれを窺ふに、前に進みたるは
 夜又丸、次に来るは、前剋吉野川にて船長に扮打たる盜賊
 なり。又次にひき続きたるは、唯今時澄が命を受けて迎に出
 たるものなれば、『こは案に差はじ』と、彼輩が柵の裡
 に入るをまつて、急ぎ逃れて此処に來り、不図郎君に見參
 し、女兒が所在を聞、いかばかりか喜ばし。さて今討殺
 し給ふ処の天怪を見るに、こはわが故郷熊野山の奥、ま
 た此吉野山の奥に住る山男とも（六オ）挿絵（六ウ・七オ）
 いひ、さとりとも云て、人を取食ふ天物なり。獵師など
 これを取んとすとも、はやくその心裡に想ふことを猜
 り、手を施さぬさきにそのことをいふ。その詞人のこ
 とし。また此天物に雌なし。よりて女子を見れば捉へ去
 りてこれと姦姪すと聞り。唐土にも是に似たるものあり。
 蜀西徼外の山中に、その名を獲と云て、猴に似て猴
 よりは大きく、色蒼黒く、歩むこと人のごとく走り、よ
 く人を攫去て、又善願盼す。純牡にして牝なし。故に人家
 の婦女を撰て妻とし、子を産す。是本草時珍が説にも看
 へたり。かゝる神変を得たる天物を、よくもしとめ給ふ



卷三 六ウ・七オ

ものかな」と、深くその勇略を感賞す。

平太郎も、庄司が危ふきを免れしことを賞し、尚焼火しつゝ、絶て久しき物語するうちに、はやくも横雲東にたなびきける頃(七)ほひになりしかば、途を索めて、人家ある方に出ばやと思ふをりから、五三人うち連て此処に来るものあり。二人はその人々の光景を窺ふに、一人の老翁涙に眼を泣はらしたるが、彼新墓を巡り見て、少しく顔色を直し、香花など備へ誦経などし果て、そこら辺をうち見たりしが、天物の殺されおるを看、いと喜しきおもちちして、俄に當吉、庄司を看やり、進み近づき問ひけるは、「見まいらずに人々は旅人にて、昨夜此処に宿り給ふとおぼゆれ。いかに是に殺されて候妖物は、何等の人か斯はなしはべりけん。知しめし給はゞ、いひ聞へ給ひなんや」とあるに、庄司、「さん候。われくは旅のものにて、昨夜道を過ちこゝに宿りはべりぬ。その妖物は、是なる若人の討認給へり」と回答すれば、翁をはじめ皆舌をまき、「あな恐し。そも此妖物は、この吉野山に(八)住、折々里に出て人を攫食ふ。よりに獵師などを催しうちとらんとすれど、不思議の神変ありて、人の想

ふことを猜り、猛きものといふともうち得ざりしに、よくも殺し給ふものかな。さて是なる新墓は、翁が女兒にて候なるが、此妖物の為に命をとられ、則今日初七日に当りて、その仇旅人の手に亡びぬること、某が喜び、何まれ是に過候はじ。されば心ばかりもその恩を謝し申たくはべれば、翁が家におはせよ」と聞ふるに、平太郎、庄司は、斯山ふところさまよひ来て、里に出べき道をわかねば、深く患ひたるを、翁がまめたちて誘引と云に、是幸ひなりと喜び、平太郎翁に対ひ、「われくそのの札を裏んとはあらざれど、不知案内の地にて途をしらねば、里の方に導き給へ」と、翁が跡につひて行程に、既十余町にして漸やく(八九)山を放れ、土地うちひらき人家其所彼所に看へ、鶏犬の声聞へしかば、昨夜より易き心もなかりしが、此時に至りてはじめてあん堵の想ひをなし、尚翁に誘引て行こと又二三町にして、忽ちひとかまへの農家の前に至りぬ。

翁平太郎、庄司に対ひ、「こは某が家にさふらふ。いざ給へ」と、さきに進み二人を引て裡に入れば、奴婢等出迎へければ、翁これに分拊、一盤の湯を齎らし来て、平

太郎、庄司等が足を洗はし、裡に請じ入、朝饌など進むに、二人は昨ふ食せしまゝなれば、ことに飢にのそみつれば、些も辞まず多くの飯をしたゝめおはれば、主妻を俱ひ出て、これを引あはし、誓を討たる恩を謝し、酒肴を出し進むれば、平太郎礼を回し、「某、幸ひにして彼妖物を討たるに、などてかく厚き款待に預るべき」と、ふかく（九才）好意を謝しければ、主鼻うちかみて云出けるは、「縁故をしり給はざれば、斯礼を申を不審給ふも理なり。聞えまいらずは涙の種にはべれど、懺悔には幾許の罪も滅すといへば、亡女兒が菩提のたねともなりぬべうおぼえ候へば、只今くわしく物語しはべるに、厭はで聞給へね。そも某は此地方に住める農民にて、名を喜三太と申ぬ。富るといふにはあらねど、万の事足はぬといふをしらず。只足らはぬといふは子にて、僅に二人の女兒をもてり。姉を桂女と云て、今年十八、妹を桜女と呼びて、今年十六になりぬ。然るに前日姉なるもの、先祖の墓に詣はべりぬ。其地方は昨夜宿り給ふ処なり。奈何なる因果にや、途中におひて甘ばかりとおぼしく、貌清らかなる男に行遭侍りしに、女兒も悪からず想ふに、彼

（九才）男わりなく云より、終に妹背のかたらひをなしぬ。その後夜毎に彼男女兒が閨房に忍び通ひしが、首の程は女兒も男を愛て、人にも包みつるが、次第に契り重なれど、何処のものとも聞へざれば、桂女少しく疑ひて、一夜のむつことの折からその在家を問ひしかど、たゞ近き辺とのみ回答て明白に聞えざりしを、桂女不審、『こは明のきぬきぬに跡を慕ひ行ん』と、心裡に想ひしを、はやくも猜し、男のいへりけるは、『おん身わが身のうへを怪しみ、慕ひ来て在家を知らんと想ひ給へど、それは辟事なり。さなし給はゞ、その身の為に悪かるべきぞ。重てさる心な持ぞ』と云さま、常とは替り何となく恐ろしかりしかば、再び慕ひ行んことをば想ひとゞまりしが、あまりに恐しくてや、我我夫婦に斯と聞えつれば、始て聞ておどろき、さる人の此辺（十才）にあるべしともおもはねば、とさまかうさま考へつるに、こは彼やま男が娘を騙らかすにこそと想ひ、その夜われ／＼夫婦をはじめ渾家のもの、寐もせで女兒を守り居たりしに、四更の頃と覺しきにはみな頻りに睡氣さして、いかにすとも堪がたく、われにもあらで睡りしに、女兒が『阿々』と叫

ぶ声に、驚き醒て看れば、いづちよりか入りけん、彼山
男女児の喉を引喰へ出行んとするにぞ、弓よ刀よとた
ちさはぐ間に、女児をばそがまゝ捨て、西の妻戸を蹴放
ちていづちともなく逃さりぬ。さるからにその無念いふ
べきかたもなく、嘆にくれけれど、甲斐なし。さて斯て
も果なしと、血属をはじめ親しき人々集ひ来て、はやく
送葬せよと進めしかとも、今彼所の山に埋めば、妖物再
び来て屍を食んことのかなしくて、一日々々と(十ウ)
過しけるに、はや初七日にもなれば、親しき人々さまぐ
に諫め聞へけるは、『屍を妖物にとらるゝは無念の事に
はあれど、いつまで家に置くべき。前日食ひ尽されしと
あきらめ、とく／＼山に埋めよ』と只願にすゝめしかば、
名残おしくも泣々昨日送葬せしが、さだめて夜半のうち
に彼怪物の為に墓をあばかれ屍をとられつらんと、今朝
あさまだきに家を立出て看たりしに、はからずもおん身
の勇をもて容易妖物を退治し給ひ、女児が墓恙なきを得
て、奈何ばかりか喜ばし。此一件は我のみにあらず、此邑
の幸なり」と云果て、且いへらく、「あまりに心なく頼
み奉るもおそれみたることにはははべれど、おん身の猛く

おはずを見かけ、頼みまいらせたき事こそ候なれ。此事諸
なはし給ひなんや」と云。平太郎うち聞、「そは十二才何事
かはしり候はねど、某が力に称ふ程のことにしあらば、何
まれ固辞申べき。とく聞え給へ」と回答すれば、主喜
び、「そはまづ忝なし。頼みまいらすべき事は、別の事に
も候はず。近頃此辺りに二人の盜賊住はべりぬ。原は紀伊、
伊勢、或は淡路、四国の辺りを徘徊しつる盜賊のよしに
て、一人の名は阿修羅王といひ、その次なるを夜刀丸と
いへり。その手下に二三十人の盜賊あり。近国の富家に
押入て強盜し、又街に出て行客を引剥、且いづちにも
あれ、容貌よき女子あれば奪ひ取て強姦をし、后には遊女
に売ぬ。かゝる悪行擅なれば、此邑などは是が為に産
をやぶり妻子を失ふもの多く、これを退治せんと公に
訴へ官兵を呼び来る時は、何処に逃去やらん、影たに看
せず。官兵去れば再び此地方に來り住み、前に訴へ
て官兵を請來りしものを捉へ十二才てこれを殺しつれば、
邑人等渾おそれて、誰ありて公に訴ゆる者なし。斯の
ごとくなれば、村老なども詮すべなく、只集合ては、三
人の棟樑のうちせめて一人を失ひなば、かゝることは

あらまじと云もてはやすのみにて、空しく年月を過しぬ。
しかるに、某が姉女児は彼妖物にとられ、深き泣しみに沈める折から、山賊の棟樑阿修羅王のもとより、使をもていひこしつるは、『我れいまだ妻を迎へねば、汝が女児を与へよ』とあるに、もし此事否と云はば、手下の盜賊を將ひ来て、女児を奪ふのみか、いかなる事を仕出さんもはかられねば、まづ欺て、『ふつゝかなる女児を迎へ給はんとあるは甚喜ばしき事に侍れば、速に送りまいらすべけれど、此程姉なる女児妖物の為に没命ぬれば、これが忌も果なば、兎も角も命にまかせ申さめ』と回答しつるに、盜賊も「十二才、此道理に伏してや、『しからは姉が忌果ば、とく婚姻を整ん』とありしが、ほとく忌も終らんとすれど、外に免るべき術もなし。あはれ客人の力をもて、此禍ひを免からし給へ。嗚呼我等夫婦過世の作業悪くてや、子といふは纒に二人の女児ならでなきを、一人は妖物にとられ、一人は強盜に奪はれんとす。我々が心の裡、奈何泣しからん。猜し給ひて、くれぐれも女児を助け給はれ」と、いと憐げに聞へしかば、平太郎、心裡不便の事に想ひ、其いふ処を慮るに、「夜刃丸とい

ふは、我深き仇なり。阿修羅王といふも、おそらくは時澄ならん。彼は是天を共にせざるの讐なり。此二人が行衛を採せしに、いま此家主が物語にてその行衛を知るごと、この身の幸なれ。此機会を過ぎず、二人の強盜を討得ば、一つには父の仇を報ゆるの孝あり、二つには「十二才里人等が患ひを除くの仁あり。是両全を得るの道なり」と想ひしかば、些も辞める色なく、喜三太にうち対ひ、「某不肖なりといへども、人の難に望むを看て、なめて力を尽さざるべき。宣はする処のごときは、実に憐に聞へ侍りぬ。奈何ともし、彼強盜二人を殺し、永き患ひを除んに、心易くおぼせよ」と、頼もしく回答すれば、主夫婦はかぎりなく喜び、「客人は女児が為には再生の親、此邑の為には城皇神とも見奉るなり。そもまづいかなる謀をもて強盜を討給ふにや」と問へば、平太郎席を進め、「われ今爾々の術を用ひば、容易く討果せめ」とあるに、喜三太をはじめ庄司も、おのれが怨みを報ゆることなれば、雀躍しつゝ、「こはよき謀にこそ」と各、笑壺に入り、尚その委しきを評議するに、「此謀を用ゆるには、せめて四五日を（十三才）挿絵（十三才・十四才）過



卷三 十三ウ・十四オ

ござでは做し難し」と、當吉庄司をとらめ、只顧その手配をなしにけり。

第六回

害を除んとして當吉讐敵を討つ
恩を謝して桜女春路に迷ふ

斯て喜三太は、姉女兒桂女が忌果されど、謀あれば、俄に阿修羅王がもとへ使をやつていはしけるは、「いまだ女兒が忌は果す候へど、諺に善は急げとやら申に、桜女もまた妖物にとられなば、我々が嘆きはさらなり、大王もさぞ乏赴からんずるに、某の日は吉日にもはべれば、婚縁を整んと想へり。此事を諾ひ給ふべきや」と告聞えけり。そも、此阿修羅王といふは、是別の人にはあらで、岩淵時澄がなれる果なり。前に三十三間堂再建の奉行たりしに、熊野におひて逆意を行状(十四ウ)勅命を

怠りし罪によつて、勅勘の身となり、都へも歸りがた
く、夜叉丸を將て吉野の奥に隠れ住み、山賊劫盜を事と
し、手下には多くの小賊を従へ、擅に往來の旅客を
劫かし金銀を奪ひ、又近国に出て、富るものゝ家に強入
り衣家財を取り、或は容貌よき女子あれば奪ひ去て、是
を花街に売り身の価をとるなど、渾て悪行の限りを尽
し、人を殺すことは麻を刈がごとくなれば、人彼を魑魅
毒龍のごとく怕れ、綽名を阿修羅王と叫びけり。素より
好色の性なれば、去頃喜三太が女兒桜女を垣間見て、
只顧に懸想しつるの余り、終に使をもて桜女を親迎んこ
とをいはしけるに、姉の忌果てこそとありしかば、流石強
て親迎ともしがたく、弥勤の出世を待おもひして居たり
しが、只今某の日は良辰なれば婚縁せんと云こしつれば、
霖雨(十五才)頃に晴れ円月を看し心地して、限りなく喜
び、回答けるは、「其方だに障りなくば、何れの日と云ふ
とも苦しからじ。とくく送り越し給はれ」といへば、使
またいへらく、「子細なく承引給ふからは、また申べき事
あり。抑世間の婚姻は必ず婿入舅入りとやらんいふ
あり。桜女を親迎給はんとらば、まづ婿入りを做して、帰

り給ふの時新人を俱し給へ。しからざれば某等がごとき
ものゝ身に於て新人を送り行は、もし路次に事あらば甚危
うしと、家主この事を深く愁ひ候なるが、大王の御心は
いかにおはすやらん」とうかざらふに、阿修羅王打わらひ、
「老人のさばかり心を費し給ふを無下なくせんは心な
し。云聞ふる処のごとく、我まづ其方に赴き喜三太老爺
にも見参し、心やすかるやうに桜女を俱して帰らん。そ
の時は黄昏を期とすべし」と約束を堅めければ、使は暇
を(十五才)告て帰りけり。阿修羅王は喜ぶことかぎりな
く、一仏出世の想ひを做、急に夜叉丸を呼て爾々のよし
を物語すれば、夜叉丸首を傾け聞いたりしが、阿修
羅王が詞おはるをまつて云出けるは、「大王前に使をも
て云やり給ふときは、喜三太女兒が忌果てこそ兎角の応答
をばせめといひしに、幾程ならず今またその喪のうち
に婚姻を整んといふこそ怪し。よくく慮かり給へ」と諫
むれば、阿修羅王首をうちふり、「否々、是なんの謀か
あらん。只わが勇威を怕れて斯はなすならん。喜三太が
分際をもてわれを欺き得べき。必心を費すことなかれ。
わが心既に決せり」と、露ばかりも肯がはされば、夜

又丸長息をつき、「此人俱に大事を謀る人にはあらじ」と、つぶやきつゝ出去りぬ。阿修羅王は夜叉丸が諫をも聴かず、手下の小賊等を集へ、喜三太がもとに赴くべき準備をぞなしにけり。

さても十六才その日にもなりしかば、喜三太がもとには十分の手はずを設け、今や来ると待処に、黄昏少し過ぬとおぼしきころほひ、阿修羅王衣服美々しくとこのえ、てか小賊十余人を將て喜三太が家に赴き、門辺に至りて斯と案内すれば、待もうけたる事なれば、多くの奴僕出迎へて正廳にいざなひ、上坐に居らしむれば、程なく家主喜三太夫婦、衣服を改め出て祝詞をのべ、美酒佳肴を出して多方に款待ほどに、阿修羅王かきりなく喜び、想はず教盃を傾けけり。またその間に陪従の小賊等にも酒肴をすゝめ饗応ければ、上下大に酔を尽しぬ。此時主夫婦は桜女を誘ひ来らんとその席をまかでしが、再び出来らざれば、阿修羅王待わびて、酌にたちたる侍女に對ひ、「夜も既に初夜とおぼゆるに、早く新人をこゝに誘引こよかし。伴ひ行んに、(十六才)此事喜三太夫婦に聞へてよ」といそがし立れば、「心得候ひぬ」

とつと立て入りければ、阿修羅王は、今や出来ぬと待処に、一室の紙門さと明て立出るを看れば、想ひもかけぬ一人の丈夫、腹巻に小手さしかため、一振の小盾尖力をわきばさみてぞゆるぎ出たり。阿修羅王愕然と驚き、瞳をさだめて看一看ば、こは奈何、横曾根平太郎當吉なり。

其時當吉高やかに叫はつて云、「やよいかに時澄。わが父兵衛尉光當は、汝が讒言の舌頭にかゝり、冤の罪を蒙り給ひ、あへなくも自害して果給へり。よりて其仇を報んとすれど、その頃は汝勅命を稟て卅三間堂の奉行たれば、これを討たば聖慮に差ひ、朝敵に均しければ、時をまつべしと、父の遺命の乖しかたく、徒に無念の日月を過せしに、不義非道の悪報早くも駈り来て、忽ち勅勤の身と(十七才)なりし程に、此時こそ父が仇を報んとせしかど、何方へ迷失しか、其行衛を知らねば、深く心を煩はし、此年頃探し尋る甲斐ありて、今宵此処に環会は、諸天善神わが志を憐ませ給ひ、功を全からせ給ふとおぼゆ。いで心よく勝負せよ」と、いきまきて罵れりたり。然れども尚わが両刀腰にあり。平太郎の黄口児

などで敵すること能はん。いざや今世の暇をとらすべし」と、腰刀を抜て斬てかゝれば、當吉も心得たりと對へ合せて戦ひぬ。此折から表の方には陪従の小賊等、正廳の騒がしきに、何事ぞと驚き、奥の方に走入るを、予ての謀なれば、庄司は此邑の若人等を將て正廳の後に埋伏して居たりしが、只今小賊等が走入らんとするを見て、俄に頭はれ出、これを遮りとらめて戦ふたり。その間に當吉は「十七ウ」終に時澄を斬伏首をとつて是を肩尖刀のきつさきに貫き、表の方に走出て、高くさし上呼はつていふ、「山賊の大將阿修羅王は、素岩淵時澄とて、我父の讐なり。今宵不図ここに出会、此年頃の素懷を遂て如斯討とりたり。残れる小賊等命おしくは速かに此地方を立退き、遠き国に去るべし。もし爾らずは、此時澄がごとくなるべきぞ」と罵りしかば、残れる小賊等は只勢と利とのみつひて、些の義氣もなく鳥の集まりたるがごとき徒なれば、大將討れても是が讐を報んとする志はなく、當吉が勢ひの猛きに恐れ、蜘蛛の子を散すがごとく、一人も残らず逃失けり。平太郎勢ひに乗じて逐んとせしを、庄司、喜三太等その過ちあらんことを想

ひ、これをどゞめければ、當吉実もと、賊をば逐て、時澄が首をもて父が靈を祭り、本懷を遂しを喜べば、庄司もわが為の仇（十八才）なれば、これを撞てその怨みをはらしけり。扱また喜三太をはじめ里人等は、さしも鬼神のごとく恐怖し阿修羅王を容易く討とりたるを感賞し、喜ぶことかぎりなく、當吉をば只神のごとく崇め尊ぶとみ多方に響応して、各々礼をそのべにける。

此時當吉喜三太に對ひ、はしめてわが身のうへを物語り、阿修羅王は素わが血属にて父の仇なることを云聞え、「また夜又丸もわが為の仇なれば、明日は山塞におしよせ、彼をも殺し、此処の害をながく除くべきに、此邑の少年等われに力を合さんやいなや」とあるに、喜三太も村長等もふかく喜び、所の少年に云ひ聞ければ、事かなと思ふ輩、當吉が今宵の手なみは知つ、その人の方人して悪しと思ふ強盜を討つことなれば、誰か否といふべき、みな勇み喜びて、彼所に行んことを望みしかば、當吉も喜び、又あらた（十八ウ）めて酒宴を設け、少年等に契約の杯をしつ、その手配を定め、其夜は別れて去にけり。斯てその夜も更たけしかば、少く睡らばやと思ふ処に、



卷三 十九ウ・二十オ

喜三太夫婦は、姉女兒の仇を殺し、妹女兒が難を救ひし當吉なれば、何をがな響応さばやと想ふにつけ、「女兒も出て這回の鴻恩を謝しまいらせよ」とあるに、桜女父母に誘引、當吉が前に出て礼をのべつ、その人の容貌を伺ふに、看ぬ前はさこそ猛々しき荒男子と想ひしに、さはなく、いと清らかによるづ風流たる男子なれば、案に相違し、少剋貪見て、胸裏に想ひつるは、「世に女たるものは、かゝる男子を夫に持てこそ本意なれ」と、さぞろに想ひこがれけれど、さすがに云よるべき術もなし。また當吉も桜女を見るに、その容貌艶やかにして都の人も恥るばかりなれば、心には、「想はざりき、此山里にかゝる女子のあるべしとは。時澄（十九オ）挿絵（十九ウ・二十オ）が恋せしも道理かな。さはあれ鄙人なれば、都の手ぶりは知るやしらすや」と、さまゞの事を問ひ試みるに、響の物に応ずるがごとく些の滞ることなく回答へければ、大に我折て、只顧その才貌を感賞せり。

斯てその夜も更ぬれば、みなおのがさまゞに寐つるに、桜女は独寐もやらで當吉が事を想ひつゞくるに、愛恋の心弥増て、想ひ忘れんとすれど忘れず、おのが閨房

をあこがれ出、忍び行身はわが家も、しらぬ闇路をたどるがごとく、辛じてかゝぐり着、「此一間こそおもふ人の臥し給ひつる処ぞ」と、少し心はおち居れど、まだ初恋のあどなきは、何と云寄すべをしらねば、徒に屏風の外に柱で、おどろれる胸をおししづめ、おししづめすれど、心にもあらで戦々ふるふ身の、屏風に触てゆるぎしかば、熟寐の黥忽ちにやみ、かばと起る音聞え、噴嚏しつゝ立出るを看れ二十うば、おもふ人にはあらずして、老さらぼひたる庄司なれば、桜女呆れまどひつ。正に是徐氏の祖龍に嫁ける想ひを做し、もみぢする顔をおし隠し遁れ出んとする処を、庄司引とどめ、「そこは桜女にはおはさずや。そも何事ありて此処にはもう来給へる」と問はて何といふべを知らず、たゞ首を俯き塵を捻るの外回答なし。その時庄司完爾笑、「回答なきは人違やし給ふらめ。慕ふ人といふは平太郎の主とこそ覚れ。彼人は某が女孀なり。しかるをわが口すからいわんは、ほこりがにも聞給ふらめど、こは素都の産にて、才も貌も世に勝れて愛たき男子にはべれば、懸想し給ふも道理とは想へど、今いふをよく弁まへ給へ。わが女兒ももとはおん身

のごとくあこがれしに、過世の契や深かりけん、終に夫婦となり、一子をさへもうけはべりぬ。斯る人であれば、未だの廿一才めなき恋なり。さればとく々想ひ止まり給ふこそよからめ。斯いへば情なき翁とおもひ給はんも懶うけれど、なべて世に女子は夫といふは只一人なるを、末も遂ざる縁としりつゝかりの契りを結び給はゞ、生涯を誤るのみか、姪婦の名を残さんことのいとおしく、斯は諫め申なり。かまへて某が妬おもふて云とばし想ひ給ひぞ」と聞ふるに、桜女驚ひたるおもゝちにて、「などさは想ひ候べき」といひさして、しばし涙にくれけるが、やゝありて云出けるは、「さる御方とは露知らず、鄙育の鈍して、武く風流ておはすれば、またなき人と想ひそめ、斯る男子を夫とせば、女たる身の幸ならめと、及ばぬ恋に方見くも、かく姪戯たる浅間しき、わが身のさがを他人に見答られて、うき恥に遭ふのみならず、主ありと聞てはいかに慕ふとも、とても叶はぬ恋なれば、廿一ウ生て想ひを悩すより、死て心を易めんこそ、遙に増りておぼゆなり。奴家が死ぬをあはれともおほし給はゞ、なきあとにて想ふ心を露ほども彼おんに聞えてたびぬ一

と云つゝも、嘆々咽々て嘆しが、予て準備やしたりけん、氷なす懐剣をぬきもてほと／＼自害すべく看へしかば、庄司慌忙是をとゞめ、「こは狂気ばしし給ふか。まつ心を静め、某が云を聞給へ。人の親の心はなべて同じければ、喜三太どのゝおん身を想ふも、某が女兒を想ふとひとしかるべきに、今もしおん身に過失あらば、父母の嘆奈何ならんと、身に比へてあわれに想ひはれば、さばかり迫る心根を無下になさしてあやまちあらば、わが女壻に恋するを妬しと想ひ、恥を与へて自害させしたりなどいはれんは口惜き事なれば、道ならぬことながら、たゞ一回のあふせをばいかにもして氷人しまゐらせんずるに、これを(廿二才)もて想ひを足らし給へ。されど今夜は天明に近づけば、一言主の神ならねども、昼は憚りあり。明夜こそ手引して、想ひを果さしまいらすべし」と、赤心を尽くして諭しつれば、桜女心裡深く喜び、かたじけなみだに胸ふたがり、礼さへ云ひかねて、只手を拝せ頓首せしが、漸やく云出つるは、「老爺の女壻に不義をせんとするいたづらものを、悪しとおぼされず、斯ばかり憐み給ふ御志、いつの世にかは忘れまいらすべき。たゞよ

きにはからひ給はれ」と聞えおきつ、別を告て還りけり。庄司は桜女を帰らして后、熟々想ふに、「われ舅の身をもてかゝる正なき氷人するは、娘が恨み世の聞えも恥かしけれど、桜女が志への程も憐れなれば、今のごとくはいひやりつれど、さすが當吉に對ひ明白に云出んは面目なし。こはいかにしてか桜女が志を果させ(廿二才)んと、いたく心を悩まし、とざまかうざまその術を考へ居るに、早くも横雲の頃ほひになりしかば、當吉をはじめ喜三太も起出て朝餉などしたゞめ、今日は山塞に趣き夜又丸をうちとらんと準備する折から、予て約しおきたる此邑の小年等、各手に得物を携へて喜三太がもとに集會来れば、當吉庄司に對ひ、「泰山は主の喜三太とともに、山塞の裏手の方に赴き給へ。某は表の方より向ひ候わん」とて、三四十人の人をふたつに別ち、ひとつをば庄司、喜三太に従がわし、ひとつをばおのれ將て走向ひぬ。庄司は桜女がこと心の裡に忘れずといへども、かゝる騒きのなかなれば、この事に紛れ謀を想ひ出すにいとまなく喜三太と俱に二十人ばかりの小年を將て、山塞を(廿三才)さして赴きけり。

柳の糸巻之三畢(廿三才)

(以下、次号へ続く。)

(本学教授)